

外的世界に関する懐疑論として、「培養槽の中の脳」という仮説による論証がある。「培養槽の中の脳」とは、私たちは実は、身体から切り離され、神経の末端がコンピュータに接続され、様々な経験を持つように設定され、すべてが平常通りだという幻想を持たされている脳であるという仮説である。この仮説を利用して次のような論証が提示される。

- (1) 私は、自分が培養槽の中の脳ではないことを知らない。
- (2) もし私が、自分が培養槽の中の脳ではないことを知らなければ、自分に手があることを私は知らない。
- (3) よって、私は、自分に手があることを知らない。

この懐疑論的論証に対する反論として文脈主義という有力な主張がある。本論文では2つの文脈主義について考察する。まず、キース・デローズやスチュワート・コーエンらの文脈主義は、「知る」が満たすべき基準（認識基準）の高低を導入する。懐疑論的仮説が登場する文脈においては認識基準が高くなり、高い認識基準においては、「私は、自分に手があることを知らない」は真である。一方、日常的な文脈においては、哲学的な文脈におけるほど認識基準は高くはなく、「私は、自分に手があることを知っている」が真である。この場合、発話の文脈が違うのであるから、「私は、自分に手があることを知らない」と「私は、自分に手があることを知っている」は矛盾しない。つまり、同じ文でも文脈により、真になったり偽になったりするものであり、真偽は文脈に依存する。こうして、文脈主義によれば、日常的な文脈においては懐疑論的結論は無関係であるということになる(1)。

次に、マイケル・ウイリアムズの文脈主義は懐疑論を、「認識論的実在論 (epistemological realism)」を前提している立場と解釈する。認識論的実在論とは、私たちの心から独立した客観的な実在についての知識を認める実在論ではなく、認識論的探究の対象として固定的なものが存在するという実在論である。懐疑論のこの前提を受け入れる理由がないのであるから、この前提を退けることによって懐疑論を回避できる。(2)。

以下、次の手順で論じていく。第1節で、文脈主義と、その反論である不変主義の対立点を確認する。第2節で、デローズ型文脈主義で論じられる例について考察し、その問題点を明示する。第3節で、ウイリアムズの文脈主義がはらむ不整合性を明らかにする。第4節で、ウイリアムズによる懐疑論回避のための議論が妥当でないことを示す。第5節で、日常における真理の概念を明確にし、その視点から懐疑論の可能性を示す。

1 文脈主義と不変主義の対立

デローズ型文脈主義では、「平らな (flat)」という語の例が取り上げられ、「知っている」は「平らな」と同じ文脈依存的な語彙に属するということから知識の文脈主義の妥当性を示せると考えられている。次のように主張される。あるものが平らであるかどうかは、文脈敏感的な基準に相対的である。たとえば、私たちは、普段の会話において、食堂にある普通のテーブルについて、「テーブルは平らである」と発言することができる。一方、精密さが要求される科学実験を行う際にはその同じテーブルについて「テーブルは平らではない」と発言するかもしれない。しかし、このことによって、普段の会話の文脈におけるより厳しくな

い基準の下での「テーブルは平らである」という発言が否定されるわけではない。つまり、次の二つの文が並び立つ。

(T1) テーブルは平らである。

(T2) テーブルは平らではない。

二つの文はどちらも真であり、真理は文脈に依存する(3)。

これに対して、不変主義者は、文脈主義に対する反例として以下のような絵画の例を挙げている。ある女性がある絵を5ドルで購入した。彼女は、その絵のことで美学の教授に接触し、その絵を描いた画家は、二十世紀の著名なアメリカ人の画家ジャクソン・ポロックであると信じるようになった。専門家は、ポロックの指紋を絵の具の表面に見つけ、本物のポロックの指紋であると断言した。一方、芸術協会は、その絵を慎重に吟味したあとで、その絵はポロック作ではないと発表した。これについて、次の二つの結論が考えられる。

(P1) この絵は、ジャクソン・ポロック作である。

(P2) この絵は、ジャクソン・ポロック作ではない。

「この絵は、ジャクソン・ポロック作である」という文の真理条件は変わっていない。それぞれの判断基準に基づいてそれぞれの結論が真であるように見える。二つの結論は矛盾している。私たちは、それぞれの可謬的な判断基準に従って、それぞれの結論に引き付けられる。私たちは、どちらかが真であるとする決定的な証拠をつかんでいない(4)。

確かに、「平らな」の語の例では、それぞれの文脈に合致して発話されているなら、(T1)も(T2)もともに真であり、そこに矛盾はない。しかし、ここで重要なのは、焦点となっているのは、単に「平ら」という語の使用ではなく、「平ら」という語を含む文の使用であるということである。文がどのように使用されるかによって初めて真偽が問題となる。この場合、(T1)が発話される状況とは、たとえば、食堂のテーブルが、食事をするには支障をきたさないかどうかの問題となっている状況であり、(T2)が発話される状況とは、たとえば、食堂のテーブルが、大学の研究室に持って行って、物理学の実験をするのに耐えるほど平らであるかどうかの問題となっている状況である。この二つの文はそれぞれ、別々の事態について述べている別々の意味を持つ文である。それらは、別々の発話文脈において別々の使い方をされているのであり、別々の真理を表すものとして発話されている。つまり、正確には、「テーブルは平らである」という一つの文について文脈によって真偽が変わるのではなく、「平ら」という語を含む二つの文の真偽はそれが使用される文脈に依存しているということである。

絵画の例で問題となっているのは「この絵は、ジャクソン・ポロック作である」という一文の真偽である。この例の設定からすると、(P1)と(P2)の文は、矛盾した文であるにもかかわらず、今のところどちらも真として認めたい気がする。しかし、実際は、どちらかの文が真である。現在のところ真偽は断定できないが、さらに何らかの証拠が集まれば、どちらかの文が真であることが判明する可能性がある。

ここで問題となっているのは、「平ら」の例と絵画の例のどちらが、「 \sim を知っている」という文のモデルと見なせるかということである。次に、この対立を念頭に、デローズ型文脈主義の妥当性を直接擁護するためにしばしば用いられている銀行の例について考える。

2 デローズ型文脈主義の問題点

銀行の例とは、次のような例である(5)。

(A) 金曜日の午後、史郎と紅子は車で帰宅しようとしている。彼らは途中銀行に寄って口座に入金しようと考えている。しかし、銀行に近づいたところ、銀行内の長い行列に気づく。すぐに入金する必要もないので、明日にしようと思史郎は提案する。しかし、紅子は、多くの銀行が土曜日には休業なので、この銀行も営業していないと言う。史郎は、「二週間前の土曜日はこの銀行に来たよ。この銀行は土曜日にも営業していることを僕は知っているよ」と言う。

(B) 金曜日の午後、史郎と紅子は銀行の前を車で通り、銀行内の長い行列に気づく。史郎は、二週間前の土曜日はこの銀行に来たら、銀行は営業していたので、明日口座に入金しようと思提案する。しかし、紅子は、月曜日の朝までに口座にお金がないと小切手が不払いになって、大変まずいことになることを説明して、「銀行はよく営業時間を変えるわ。明日この銀行が営業していることをあなたは本当に知っているの」と尋ねる。史郎は、この銀行が明日営業していることを確信してはいるが、「知らないよ。今日のうちに行った方がいいね」と返事をする。

文脈主義によれば、(A)での史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という主張と、(B)での史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という主張はともに真である。二つの主張は矛盾しているように見えるが、発話の文脈が異なるので矛盾してはいない。

問題は、私たちの知識のあり方である。したがって、知識に関わる言葉の私たちの日常的使用に着目する必要がある(6)。この日常的視点から、銀行の例について考えていこう。

まず、(A)の状況においてなされている「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という発言は、二週間前の土曜日に営業していたという点が根拠となっていると言える。それに対して、(B)の状況では逆に、小切手の不払いに関する責任の重大性と、銀行がよく営業時間を変えるという情報を根拠に、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という発言がなされていると言える。この二つの状況を提示された場合、どう判断するだろうか。まず、二つの別々の状況における二つの知識帰属文をそれぞれの根拠に基づいて認めるといふ考え方があろう。つまり、二週間前の土曜日に営業していたという根拠も、小切手の不払いに関する責任の重大性と、銀行がよく営業時間を変えるという根拠も、それぞれ別々の状況で得られたものであるのだから、それぞれ同等のものと見て、それぞれの状況で発話された、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」と「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という二つの文をそれぞれの状況において真として認めるといふ考え方である(これは、文脈主義と合致する考え方である)。

しかし、(A)の状況で、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」と発言したが、それまでは念頭になかった新たな判断根拠の出現によって(B)の状況、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という発言は間違いであり、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」と言うべきだと考えられかもしれない。不変主義はこの立場に立っている。不変主義者は、史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という文の真理条件は変化しないと考え、たとえば次のように主張する。(A)における「知っている」という語の使用は、その語の「ルーズな使用(loose use)」であり、

(B)における「知っている」という語の使用は、その語の字義通りの使用（厳格な使用 (strict use)）である。この主張によれば、(A)における史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という文と、(B)での史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という文は矛盾しており、(B)の状況において、(A)における史郎の「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という文は偽であると見なされる(7)。しかし、紅子が新たに示唆する事柄よりも、二週間前の土曜日に営業していたという点を重視することによって、あるいは土曜日に銀行が営業するという確信が強さから、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」という文は間違いであり、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という文が正しいと考える可能性もある。だが、いずれにしても、この場合、問題となっているのは、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という一文が真か偽かということである。

だが、次のような可能性もある。(A)のような状況では、知っているとも知らないとも判断できないという可能性である。これは(B)のような状況にも言えることである。さらに、(A)の状況において、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」と発言したが、(B)の状況で紅子の発言を聞いて、(A)の状況における「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」という発言に確信が持てなくなり、そうかと言って、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」と発言することも躊躇われ、「分からな」と判断停止するという可能性もある。

ここで、土曜日に実際に銀行に行つて、営業しているか否かを確認する場面を想定してみる。まず考えられるのは、実際銀行が営業しているかどうかに着目する視点である。つまり、もし営業していたとするなら、そのことから、(A)の状況における「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」は真、(B)の状況における「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」は偽であり、もし営業していなかったとするなら、そのことから、(A)の状況における「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」は偽、(B)の状況における「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」は真である(これは、不変主義と合致する考え方である)。

しかし、次のような考え方もありうる。実際に土曜日に銀行が営業しているかどうかにかかわらず、それぞれの状況に即して判断するという考え方である。すなわち、(A)という状況においては、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知っている」と発言してよいのであり、(B)という状況においては、「私は、土曜日に銀行が営業していることを知らない」と発言してよいのである(これは、文脈主義と合致する考え方である)。

以上から次のように結論することができる。日常言語における「くを知っている」という文の使用は多様である(8)。認識基準の緩い文脈で「くを知っている」が真であり、認識基準の厳しい文脈で「くを知らない」が真であるとすると文脈主義の主張は、知識帰属文の多様な使用状況をパターン化するものであり、一面的である(不変主義の「ルーズな使用」・「厳格な使用」についても同様である)。このことは、この種の文脈主義が、知識帰属文の真偽文脈依存性テーゼに基づいた懐疑論の定式化に成功していないことを示している。

3 ウィリアムズの文脈主義における不整合性

ウィリアムズの文脈主義では、認識基準は、それぞれの会話の主題に影響を受けるのであり、会話の進展によつて認識基準の高低の変化が生じるのは、一定の主題の文脈においてのみである。懐疑論が日常における認識基準から離脱するのは、主題文脈を変えることによつてである。学問的探究には、その探究に特有の主題文脈を設定する一般的な諸前提が存在している。ウィリアムズはこの諸前提を、「方法的必然性 (methodological necessities)」と呼んでいる。方法的必然性は、それぞれの学問的探究のための「学問上のメタ文脈 (disciplinary meta-context)」を規定する。伝統的な知識の基礎付け主義は、その方法的必然性として、認識論的實在論を前提している。認識論的實在論は、外的世界についての知識よりも感覚的経験による知識が優先するという認識論的優先性を特徴とする。この認識論的實在論に基づいて根拠付け主義は、認識とは責任ある振舞いによつて得られるものであり、根拠がないにもかかわらず命題を真と信じることは無責任であり、ある命題を信じることが正当であるためにはその命題を真とするための根拠としての証拠を所有していなければならぬという「先行する根拠付け要求 (Prior Grounding Requirement)」(以下 PGR とする) を主張する。懐疑論の主題文脈は、日常的知識ではなく、知識それ自体である。懐疑論は、知識それ自体という主題の探究において、認識論的實在論、PGR を方法的必然性として理論的に前提する。その上で、結論として、感覚的経験がそのままでも外的世界は異なりうるのであるから、感覚的経験による知識に基づいて外的世界の知識を正当化することは不可能であると考え、外的対象の知識に対する懐疑を提示する(9)。

一方で、ウィリアムズは、知識の正当性を説明するものとして、知識の正当化が有する「デフォルトと異議申し立ての構造 (Default and Challenge structure)」(以下 DC とする) を提示する。DC とは、知識主張の正当性に対する適切な異議申し立てがない場合は、知識主張をする資格があるが、そうした異議申し立てがある場合には、それに対する弁明が必要であるという構造である。ウィリアムズによれば、懐疑論の理論的前提と比べ、DC の方が好ましい理論であり、懐疑論のメタ文脈の理論的前提を受け入れるべき理由はない。したがって、DC を採用し、懐疑論の理論的前提を避けることによつて懐疑論を回避できる(10)。さて、ここで、DC の方が好ましいとはどういうことか。これについてウィリアムズは明確に述べていないが、まず、認識論的實在論は間違いであり、認識の日常実践という事実と合致していないのに対して、DC は事実と合致した正しい理論であるとウィリアムズが考えている可能性がある。この場合、認識論的實在論に基づく懐疑論も間違いであるということになる。しかし、この主張は、先の懐疑論的方法論的必然性についての文脈主義的論述と組み合わない。ウィリアムズは、懐疑論の理論的前提性を論じ、懐疑論の問題を言葉の誤用による疑似問題と見なし、懐疑論を無意味とする「治療的診断」に対して、懐疑論は自然で直観的なものではなく、多くの理論を前提しており、考えられているよりもずっと複雑で理論負荷的であるという「理論的診断」を提示している。懐疑論の理論的前提(方法的必然性)を間違いとすることは、この文脈主義的な理論的診断と齟齬をきたしているように見える。あるいは、PGR よりも DC の方がよい良い理論であり、好ましい理論であるとウィリアムズは考えているのかもしれない。この場合、そう考える根拠として二つの可能性がある。一つ目は、DC は、認識の日常実践の現象によりうまく合致しているのだから、PGR のように、現象と合致させるための「場当たり的な仮説」を必要としないという根拠である。この場合、「場当たり的な仮説」で具体的に何を意味しているのか不明であるが、たとえ PGR が

そのような仮説を必要としたとしても、PGR が間違った理論ということではなく、必ずしも DC よりも PGR を採用することが妨げられるわけではない。二つ目は、PGR を採用すると、懐疑論的議論によって、認識の日常実践を否定する結果となってしまう、そのような結果を引き起こしてしまう理論は悪い理論であるという根拠である。しかし、それは、認識の日常実践は否定されるべきでない事実なのであるから、PGR がその事実を説明できないとするなら、それは間違った理論であるということの意味しているのではないだろうか。もしそうだとすると、その考え方は、文脈主義的な理論的診断とかみ合わないであろう(11)。以上のように、ウィリアムズの主張は不整合性をはらんでいるように見える。

4 ウィリアムズの懐疑論回避論証の批判

次に、懐疑論の回避をその理論的前提を退けることによって行うというウィリアムズの戦略そのものが妥当かどうかについて見ていく。ウィリアムズによれば、懐疑論は、PGR や認識論的優先性を前提として、外的世界についての知識は経験的知識によって基礎付けられないと主張する。確かに、「培養槽の中の脳」の仮説では、私たちは、平常通りの知覚的経験を持ちながらも、実は培養槽の中の脳なのであるという想定がなされている。培養槽の中の脳であってもなくても同じ知覚的経験を持っているのであるから、知覚的経験による知識によって外的世界についての知識を基礎付けることはできないということになる。また、デカルトは、『省察』の第一省察において、知覚的経験は私たちを欺くことがあり、疑わしいということ、夢の中では事実とは全くこととなったことを経験し、覚醒時と全く同じ知覚的経験を夢の中でもするのであるから、私は手を持っているといったことも疑わしいと論じている。

しかし、懐疑論を、認識論的優先性を前提とする立場と解釈する必然性はない。デカルトは、方法的懐疑をさらに遂行して、私たちを欺く神を想定し、数学的知識についても疑いをさしはさむ。すなわち、デカルトは、欺く神の視点から、知性的知識である数学的知識を直接的に懐疑の対象としているのである。そうであるとするなら、欺く神の視点から、知覚的経験による知識を媒介することなく、物理的知識、知性的知識に対して直接的に疑いをさしはさむことができる、ということになる。「培養槽の中の脳」の仮説においても、コンピュータの操作によって、私たち脳は、物理的知識、知性的知識を持っているという幻想を抱かされている、ということになる。つまり、ここで懐疑論は、知覚的経験による知識を含めた知識全体の客観性に対して疑いをさしはさんでいると解釈することができる。

トマス・ネーゲルもまた、懐疑論と客観性の関連性について次のように述べている。客観性と懐疑論とは密接に関連している。どちらも、自分自身が含まれている現実世界が存在し、見かけ (appearances) は、自分と外部のものとの相互作用から生じるという考えから生まれる。私たちは、これらの見かけを無批判に受け入れることはできず、自分の成り立ちが見かけにどのような影響を与えているのかを理解するよう試みなければならぬ。そのために、私たちを含む世界についての考え方を形成するよう試みる。つまり、なぜ世界がさしあたりそのように見えるのかも含めて、私たちが自身と世界との双方を説明するよう試みる。しかし、この考え方も私たちが形成するのだから、やはり私たちと世界との相互作用から生まれてくる。もっとも、はじめの相互作用に比べれば、

より複雑で自覚的ではあるけれども。もし最初の見かけが、私たちに十分理解できない仕方では私たちの成り立ちに左右されているという理由で信頼できないのなら、このより複雑な考えも当然同じ疑惑にさらされる。というのも、私たちと世界との相互作用を理解するために使うものはそれ自体、理解の対象ではないからである。自分の外にどう踏み出そうと試みても、何かがレンズの背後に残る。私たちの内側の何かが描像を左右するし、このことによって、私たちは本当に現実接近しているのだろうかと疑うことになってしまう(12)。

これについてウィリアムズは次のように解釈する。ここでは、懐疑論と客観性の関連性ではなく、現実世界に関する知識全体の正当化要求と懐疑論の関連性が示されている。現実世界に関する知識全体の正当化にあたり、現実世界と見かけが対置され、現実世界のあり方に關する私たちの信念のすべてが見かけとされる。ネーゲルの主張では、この見かけの知識が優先的な地位を有していて、この見かけの知識に基づいて現実世界のあり方の理解が試みられるが、それはうまくいかずに、懐疑論をもたらされる。つまり、懐疑論は、見かけの知識の認識論的優先性を前提としている(13)。

ここで重要なのは、現実世界は私たちの思考から独立して存在していて、その中に私たちがもいて、現実世界のそれ自体としてのあり方と、私たちと現実世界との相互作用から生じる見かけが相違する可能性があるという實在論の立場にネーゲルが立っていることである。ネーゲルは、この實在論を前提としたうえで、私たちには、現実世界の実際のあり方を理解したいという客観性への願望があることを指摘している。しかし、感覚的知識を含めた、現実世界に関する私たちの信念・知識全体の客観性に関して、自分たちの主観的な視点から離れるのは不可能であり、現実世界について間違った信念を抱いているのではないか、現実世界に接近していないのではないかという懐疑が生じることになる(14)。このように、ネーゲルの懐疑論は、知識の客観性を問題としており、単にウィリアムズの言うような認識論的優先性を前提として懐疑を提示しているわけではない。

ネーゲルの懐疑論は、實在論を介した知識の客観性に対する疑念である。そのように解したとしても、ウィリアムズには、ネーゲルが考える客観性に別の客観性の概念を対置して懐疑論を回避するという道がある。ウィリアムズは、「客観性における進歩」、「ますます客観的であること」といった概念を支持する。私たちは、「客観性における進歩」に常に開かれている。かつて現実世界はある状態にあると考えられたが、その後の探究によってそうではないと判明するならば、それは単なる見かけであった。そこには、独断的にならずに、現実世界に関する見解とその見解を支持する特定の経験について進んで再検討するという態度があり、それは、現実世界に関する見解の根拠を示せるかどうかということではない。したがって、そうした客観性の概念は懐疑論とのつながりを持たない(15)。

しかし、もしウィリアムズがこうした立場をとるとするならば、それは、ネーゲルの實在論に基づく客観性概念を否定して、それと対抗的な客観性概念によって知識の正当化をするという哲学的主張である。つまり、ここには、實在論とその反対論という哲学的対立がある。しかも、ウィリアムズは、真理の「デフレ主義(deflationism)」という哲学的理論を採用しており、デフレ主義によって實在論を拒否するという方法をとることができる。デフレ主義とは、「真である」は、「實在と対応している」や「受け入れられている信念体系と整合している」といった「実質的な性質」を表しているのではなく、そうした哲学的分析を要しない

「実質的でない性質」だと見なす考え方である。デフレ主義によって実在論を拒否できれば、それによってネーゲルの懐疑論を回避できる。しかし、デフレ主義には、検証不可能な過去時制文の真理を認めることができないという問題や、「実質的でない性質」の意味を理解できないという問題があり、デフレ主義の妥当性には疑問がある(16)。以上のように、哲學的論争という枠組みの中でどちらの立場が正当なのかを決定することは困難である。

5 日常における真理と懐疑論の可能性

これまでの議論によって、第一に、デローズ型文脈主義では懐疑論の定式化がうまくいっていないということ、第二に、ウイリアムズの主題文脈主義は不整合性をはらんでいるうえに、その懐疑論回避論証は成功していないということ指摘した。最後に、私たちの日常における真理のあり方に戻って、その視点から懐疑論の可能性について論じたい。

そもそも私たちの日常において「真理」、「真実」、「真」といった言葉はどのような使われ方をしているのだろうか。たとえば、コーヒーが嫌いな友人に、「僕は、コーヒーは体に良いことを知っているよ」と発言する場面を考えてみる。その発言を聞いて本当にそうなのかと尋ねる友人に対して、「僕はそのことを本当に知っているんだ」とか「その知識は正しいんだ」とか発言し、その根拠として、コーヒーに含まれる成分とその効能についての専門的知識に言及するかもしれない。こうして、主張された文の真偽が問題とされるとき、それに関連する根拠が提示され、その根拠が確かなものとして認められことによって、その文は真であると言われる。しかし、「真理」について言えることはそれだけではない。

これに関して、ワイトゲンシュタインが重要な指摘をしている。ワイトゲンシュタインは、数学の基礎についてのある講義において真理の対応説を批判している。しかし、ウイリアムズが考えたように、ワイトゲンシュタインはデフレ主義を信奉していたわけではなく、「真理」と「判断と事実との一致」の連関的使用を否定したわけでもない。ワイトゲンシュタインの批判の矛先は、真理を、対応説や整合説などの哲学理論で説明することに向けられている。ワイトゲンシュタインによれば、一つの真理理論があると考えるのは間違いであり、ある一つの真理理論によって「真理」という言葉の使用を説明したり、それと合致しないように見える言葉の個々の使用のケースをそれと合致させようとすることは間違いである。なぜなら、私たちは日常生活において、「真理」といった言葉を多様な意味で使用しているからである。たとえば、「ある判断が真理である」ということは、その都度の場面で、「それは事実と一致している」、「他の判断と整合的である」、「それは実際上うまく機能している」等々の意味で言われているのである(17)。

ここで、特に、「真理」という言葉と「判断と事実との一致」という言葉の連関という側面に着目したい。その側面について何が言えるかを見るために、「人類が誕生するずっと前の地球において、人類が全く知らないある生物が生息していたのであり、その証拠はすべて人類が誕生する以前に消失してしまった」という文を考えてみる。この文の真偽が検証不可能だとしても、「この文は真かもしれない」と私たちは発言できるのであり、この文を真と確定する事態がどのようなものであるかを私たちは考えることができる。この場合、その事態とは、人類が誕生するずっと前の地球において、人類が全く知らないある生物が生息していたのであり、その証拠はすべて、人類が誕生する以前に消失してしまったということであ

る。ここで重要なのは、「この文は真かもしれない」という発言の背後において、事実が私たちからいわば独立にあつて、判断や主張がその事実と一致したとき、その判断や主張は真理であるという信念を私たちが日常的に抱いているということである。ただし、ここから何か實在論的主張を哲学的に展開しようとしているわけではない。これは単に、私たちは、「真理」という言葉をこのような意味を持つものとして理解しているということであり、それ以上でも以下でもない。

このことから、外的世界の懐疑論の可能性を見て取ることができる。すなわち、それは、判断と事実との一致という意味での真理に対して懐疑の眼を向ける懐疑論である。言い換えると、この懐疑論は、ネーゲルのように哲学理論としての實在論に対してではなく、真理は判断と事実の一致であるという日常的な信念に対して、そこからさらに哲学的思考を展開して、事実である外界はそもそも實在するのか、幻想ではないのか、かりに外界といったものが實在するとしても、私たちの知識は本当にその外界に到達できている客観的なものなのか、といった哲学的懐疑を提示しようとするものである。比喩的に言えば、本論で考察した文脈主義が懐疑論を、並行的に存在する文脈の違いとして定式化しようとしたのに対して、ここで指摘した懐疑論は、日常という直線の終点の延長上に直接連なるものとして理解することができる。このことから、なぜ懐疑論が自然で直観的であるように見えるのかは明らかである。それは、事実が私たちからいわば独立にあつて、判断や主張がその事実と一致したとき、その判断や主張は真理であるという日常の信念が自然で直観的であるように見えるからである。この懐疑論は、そうした私たちの日常的な信念に対して直接的に疑念を提示しているものと捉えることができるわけである。こうした懐疑論は、本論で取り上げた文脈主義が考察の対象とした懐疑論とは異なるものであり、この文脈主義による懐疑論回避論証の範囲外にある。この懐疑論をどのように論駁できるかはまた別の問題であり、これについては次の課題としたい。

注

- (1) Cf. DeRose (2002), p. 168, Cohen (2014), p. 70.
- (2) Cf. Williams (1996).
- (3) Cf. Cohen (2014), p. 73.
- (4) 以下の例とその分析については次を参照せよ。 Conee (2014), pp. 75-77.
- (5) Cf. DeRose (1992), p. 913.
- (6) 文脈主義者自身も、文脈主義が、そういった言葉の日常的な使用によって支持されてゐると考えている。 Cf. DeRose (2002), pp. 168-170.
- (7) Cf. Davis (2007), 408, Conee (2014a), pp. 65-66; Conee (2014b), p. 78.
- (8) 日常における「知っている」という言葉の働きに関する実験的検証が行われている。その実験結果は、「知っている」という言葉の多様な使い方を示すものと解釈することができる。次を参照せよ。 Buckwalter (2010) 神山 (二〇一五) 一三三―一三七頁。
- (9) Cf. Williams (2001), pp. 147-148, 186-199, 249; Williams (2004), pp. 173-177, 185, 189, 190, 192, 193, 195.
- (10) Cf. Williams (2001), pp. 148-157, 187, 197.
- (11) Cf. Williams (2001), pp. 146, 153-157, 170, 249.

- (12) Nagel (1986), pp. 67-68.
 (13) Cf. Williams (1996), pp. 249-250.
 (14) Cf. Nagel (1986), pp. 67-68, 70-71, 90-92.
 (15) Cf. Williams (1996), pp. 251-254.
 (16) ハヤシトヤスの「トノヲ辯じること」 Williams (1996), pp. 237-247 を「トノヲ辯じること」Putnam (1999), pp. 50-54, 原田 (1012) を参照せよ。
 (17) Cf. Wittgenstein (1975), pp. 68-76, 238-256, Wittgenstein (1980), pp. 75-76.

参考文献

- Brendel, Elke and Jäger, Christoph [eds.] (2005): *Contextualisms in Epistemology*, Springer.
 Buckwalter, Wesley (2010): “Knowledge Isn’t Closed on Saturday: A Study in Ordinary Language,” *Review of Philosophy and Psychology* 1 (3), pp. 395-406.
 Cohen, Stewart (2014): “Contextualism Defended,” in Steup, Turri, and Sosa, [eds.] (2014), pp. 69-75.
 Conee, Earl (2014a): “Contextualism Contested,” in Steup, Turri, and Sosa, eds. (2014), pp. 60-69.
 ----- (2014b): “Contextualism Contested Some More,” in Steup, Turri, and Sosa, eds. (2014), pp. 75-79.
 Davis, Wayne A. (2007): “Knowledge Claims and Context: Loose Use,” *Philosophical Studies* 132, pp. 395-438.
 DeRose, Keith (1992): “Contextualism and Knowledge Attributions,” *Philosophy and Phenomenological Research* 52-4, pp. 913-929.
 ----- (2002): “Assertion, Knowledge, and Context,” *Philosophical Review*, vol. 111, no. 2, pp.167-203.
 原田淳平 (1012): 「真でも偽」よりの性質が「実質的」ならば「トノ」も「メタフオシカ」 大阪大学大学院文学研究科哲学講座 1127-1139頁。
 神田和好 (1015): 『懐疑と確美性』 春秋社。
 Nagel, Thomas (1986): *The View from Nowhere*, Oxford University Press.
 Putnam, Hilary (1999): *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, Columbia University Press.
 Steup, M., Turri, J., and Sosa, E., [eds.] (2014): *Contemporary Debates in Epistemology*, Second Edition, Wiley Blackwell.
 Williams, Michael (1996): *Unnatural Doubts*, Princeton University Press.
 ----- (2001): *Problems of Knowledge: A Critical Introduction to Epistemology*, Oxford University Press.
 ----- (2004): “Knowledge, Reflection and Sceptical Hypotheses,” in Brendel and Jäger [eds.] (2005), pp. 173-201.
 Wittgenstein, Ludwig (1975): *Wittgenstein’s Lectures on the Foundations of Mathematics: Cambridge 1939*, C. Diamond [ed.], The University of Chicago

Press.
..... (1980): *Wittgenstein's Lectures: Cambridge 1930-1932*, D. Lee
(ed.), Basil Blackwell.